

子どものための住環境要件に関する研究(2) (梗概)

湯川利和 瀬渡章子
塘 なお美 糸賀万記

目次

- I 研究目的
- II 調査概要
- III 高層住宅の子どもの生活時間と子ども部屋
 - 1. 生活時間
 - 2. 子ども部屋
- IV 高層住宅環境が子どもの心身に与える影響について
 - 1. 不定愁訴と諸要因との関連分析
 - 2. 性格特性と諸要因との関連分析

I 研究目的

本研究の目的は、今後も都市地域での増加が予想される高層住宅の環境が、子どもの発達と活動を阻害しないための空間的条件を全面的に明らかにすることである。また高層住宅に限らず、さまざまな住環境における子どもの生活上・心身上的問題点や要求を明らかにすることによって、今後の既存住宅地区をも含む住環境改善のための基礎的知見を得ることを、もうひとつの目的としている。本研究は、昨年度に後く第2年度の研究である。今回は、子どもの生活をできるだけトータルに把握することを考慮して、生活時間や子ども部屋に注目するとともに、高層住宅環境が心身に与える影響について分析を試みた。

II 調査概要

調査は、幼児母親、小学生、小学生母親を対象に、調査票留置自記法により行った(表1)。調査地の南港ひかりの団地は、大阪湾の埋め立て地・南港ポートタウン内にあり、都心までの所要時間は約30分である。団地は、

表1 調査概要

調査時期	昭和59年8月30日～9月5日		
調査方法	調査票留置自記法		
	幼児母親	小学生母親	小学生
配布数	203	161	161
有効回収数	184	134	134
回収率・%	90.6	83.2	83.2

* 「小学生母親」と「小学生」は同一世帯。

総戸数1,508戸で14階建6棟から成り、住棟形式はすべてツインコリダー型、住戸タイプは2DK・3DKが中心である(表2)。

調査対象世帯は、ほとんどが核家族で、家族人数の平均は約4人である。母親は専業主婦が圧倒的に多いが、小学生世帯になると内職・パートを含めて、3割の就労がみられる。居住年数は長く、小学生世帯では約半数が5年以上である(表3)。表4は、対象となった子どもの年齢構成を示している。

III 高層住宅の子どもの生活時間と子ども部屋

1. 生活時間

幼児、小学生の生活時間を知るために、主な行為ごとの所要時間を母親に記入してもらった。表5、6は、その平均値を示している。

1-1 幼児の場合

幼児では、家の中で遊ぶ時間が長い。それは2～3才では約4時間で睡眠について長い。4～6才になると家の外での活動時間の方が長くなる。ただし、これらはテレビ視聴を除外しており、それを考慮するならば住戸内遊び時間ももっと増加する。テレビ視聴時間は、2～3才、4～6才ともに約2時間で年齢差はほとんどない。テレビを見ている時間帯やその時の家族の様子などはわからないが、小学生の平均値とほぼ同じであることは注目される。また一日平均、テレビを4時間以上見る子どもが5人に1人の割合でおり(このことも小学生と同様の現象であるが)、長時間のテレビ視聴が幼い子どもの発達をゆがめているのではないかと懸念される。

屋外遊び時間は幼児全体で2.5時間で、年齢別にみると一人で外へ遊びに行ける4～6才の方が長い(差は24

表2 団地概要

団地名	南港ひかりの団地	総戸数	1,508戸
供給主体	住宅・都市整備公社	住棟形式	ツイン・コリダー型
敷地面積	51,776.58 m ²	階数・棟数	14階建・6棟
建ぺい率	18.4%	入居開始	昭和52年11月
容積率	185.3%	賃貸・分譲別	賃貸
戸数密度	291戸/ha	住戸タイプ	1DK(156戸)
人口密度	1,019人/ha		2DK(754戸)
			3DK(598戸)

表3 居住者の属性

		幼 児	小 学 生
平均家族人数		3.8人	4.1人
家 族 構 成	核 家 族	長子就学前児 87.0 (%)	小学生 78.0 (%)
		〃 小学生 9.0	14.6
		〃 中学生以上 1.1	
	直 系	長子就学前児 2.3	1.6
		〃 小学生 3.3	3.3
		〃 中学生以上 0.6	0.6
欠 損 家 族 そ の 他		(177)	1.6 (123)
母 親 年 齢	20代	43.3 (%)	2.6 (%)
	30代	54.9	80.0
	40代	1.8	16.5
	50代	(164)	0.9 (115)
母 親 就 労	フルタイム	10.6 (%)	13.0 (%)
	パートタイム	3.5	12.9
	内 職	2.3	4.3
	専業主婦	86.3 (171)	69.8 (116)
世 帯 主 職 業	管理職	9.9 (%)	15.9 (%)
	事務職	17.0	15.0
	専門・技術職	19.3	10.6
	販売・サービス職	25.1	19.5
	技能・労務職	12.3	14.2
	自営・自由業	15.2	23.0
	その他	0.6	0.9
無 職	0.6 (171)	0.9 (131)	
居 住 年 数	1年未満	11.7 (%)	8.7 (%)
	1年以上2年未満	13.3	7.0
	2年以上3年未満	10.0	10.3
	3年以上4年未満	12.2	15.7
	4年以上5年未満	12.8	10.3
5年以上	40.0 (180)	48.0 (127)	

()内は回答者数

表4 子どもの構成 (人数)

年齢	幼 児			小 学 生			
	男	女	計	学年	男	女	計
2才	33	25	58	1年	20	18	38
3才	28	28	56	2年	8	13	21
4才	21	10	31	3年	15	5	20
5才	12	19	31	4年	13	12	25
6才	4	5	9	5年	8	7	15
				6年	11	4	15
計	98	87	185	計	75	59	134

分)。住棟内遊びも予想以上に長く(幼児全体で1.4時間)、2～3才でより長い。住棟内での遊び場所とは廊下、階段、エレベーターホールなどであるが、廊下遊びに対する母親の態度をみると、子どもの年齢が低いほど、また居住階が上がるほど寛容で、子どもの姿が見えるので安心と答えている。

階別の分析では、①2～3才では、上階の方が、「住戸内遊び」「住棟内遊び」「昼寝」時間が長い ②4～6才では、上階の方が、「住戸内遊び」「住棟内遊び」「テレビ視聴」時間が長い、という結果を得た。

1-2 小学生の場合

小学生になると、遊び時間が減少し、学校生活や学習時間が増える。幼児期と比較して住戸内遊びの時間は著しく減少するが、半面、低学年では屋外遊び時間が最大となる(3.1時間)。しかし高学年の屋外遊び時間は最少となる(2.2時間)。それでもテレビ視聴時間は低学年、高学年とも2.3時間と全く差がみられない。

階別の分析では、①高学年で、上階の方が住戸内、屋外とも遊び時間が長く、下階の方が住棟内遊び時間が長い ②低学年では下階の方が屋外遊び、住棟内遊び、テレビ視聴時間が長い ③低学年、高学年とも上階ほど、塾・習い事の時間が長い、という結果を得た。しかし、

表5 幼児の生活時間—平日の晴れた日—(年齢別・居住階別平均値)

行 為	2～3才			4～6才			幼児全体		
	2～5階	6～14階	計	2～5階	6～14階	計	2～5階	6～14階	計
家の中で遊ぶ (テレビを除く)	3.7(25)	3.9(69)	3.8(94)	2.3(18)	2.5(41)	2.4(59)	3.1(43)	3.4(110)	3.3(153)
住棟内で遊ぶ	1.2(25)	1.9(73)	1.7(98)	0.9(19)	1.3(44)	1.2(63)	1.0(44)	1.6(117)	1.4(161)
屋外で遊ぶ	2.4(26)	2.4(73)	2.4(99)	2.9(18)	2.8(42)	2.8(60)	2.6(44)	2.5(115)	2.5(159)
テレビを見る	2.1(26)	2.2(74)	2.2(100)	1.8(19)	2.3(44)	2.1(63)	2.0(45)	2.2(118)	2.1(163)
学 習	0.0(29)	0.1(80)	0.1(109)	0.3(21)	0.3(44)	0.3(65)	0.1(50)	0.1(124)	0.1(174)
塾・習い事	0.0(27)	0.0(83)	0.0(110)	0.5(22)	0.4(43)	0.4(65)	0.2(49)	0.2(126)	0.2(175)
お手伝い	0.1(28)	0.1(77)	0.1(105)	0.1(21)	0.2(45)	0.2(66)	0.1(49)	0.1(122)	0.1(171)
昼 寝	1.5(27)	1.9(79)	1.8(106)	0.3(21)	0.3(45)	0.3(66)	1.0(48)	1.3(124)	1.2(172)
幼稚園・保育園 に行っている	0.8(30)	0.6(84)	0.7(114)	4.5(21)	4.7(46)	4.6(67)	2.3(51)	2.0(130)	2.1(181)
睡 眠	10.3(24)	10.4(77)	10.4(101)	10.1(18)	10.2(45)	10.2(63)	10.2(42)	10.3(122)	10.3(164)

注：()内は回答者数

表6 小学生の生活時間—平日の晴れた日—(学年別・居住階別平均値)

行 為	低 学 年			高 学 年			小学生全体		
	2～5階	6～14階	計	2～5階	6～14階	計	2～5階	6～14階	計
家の中で遊ぶ (テレビを除く)	1.8(18)	1.8(42)	1.8(60)	1.5(16)	1.8(25)	1.7(41)	1.6(34)	1.8(67)	1.7(101)
住棟内で遊ぶ	1.2(19)	1.0(41)	1.1(60)	1.1(15)	0.5(24)	0.7(39)	1.2(34)	0.8(65)	0.9(99)
屋外で遊ぶ	3.2(18)	3.0(45)	3.1(63)	2.0(16)	2.4(25)	2.2(41)	2.6(34)	2.8(70)	2.7(104)
テレビを見る	2.6(19)	2.2(48)	2.3(67)	2.4(17)	2.3(26)	2.3(43)	2.5(36)	2.2(74)	2.3(110)
学 習	1.0(18)	1.0(46)	1.0(64)	1.5(17)	1.5(25)	1.5(42)	1.3(35)	1.1(71)	1.2(106)
塾・習い事	0.8(19)	1.3(48)	1.2(67)	1.0(20)	1.2(26)	1.1(46)	0.9(39)	1.3(74)	1.2(113)
お手伝い	0.3(18)	0.4(46)	0.4(64)	0.4(16)	0.4(25)	0.4(41)	0.3(34)	0.4(71)	0.4(105)
学校に行っている	6.6(18)	6.4(49)	6.5(67)	7.6(17)	7.6(25)	7.6(42)	7.0(35)	6.8(74)	6.9(109)
睡 眠	9.9(19)	7.7(49)	9.8(68)	9.3(18)	9.5(27)	9.4(45)	9.6(37)	9.7(76)	9.7(113)

注：()内は回答者数

幼児のように、上階ほど全住戸内および住棟内活動時間が長いという諸活動相互の整合性は見出せなかった。

1-3 NHK 世論調査結果との比較

小学生については、NHK 世論調査結果との比較を試みた。ただし、この調査地が東京であること、調査時期が12月であること、また昭和52年の調査であることをあらかじめことわっておく。比較可能な生活行為は、睡眠、学校にいる、塾・けいこごと、自宅勉強、遊び、テレビの6項目である(表7)。

睡眠時間は、高学年ではほぼ等しい(南港9.4時間：東京9時間26分)が、低学年では南港が少し短い(9.7時間：10時間3分)。学校に行っている時間では、低学年6.5時間：5時間57分、高学年で7.6時間：6時間59分で南港の方が長い。学習塾とけいこごとは、合計時間で比較する

表7 東京の小学生の生活時間—平日の平均値—
(NHK 調べ)

	低 学 年 (時間) (分)	高 学 年 (時間) (分)	小学生全体 (時間) (分)
睡 眠	10.03	9.26	9.45
学校にいる時間	5.57	6.59	6.27
学習塾での 勉強時間 * 1 * 2	1.17 (13)	2.02 (43)	1.45 (27)
けいこごとの 時間 * 1 * 2	1.31 (58)	1.27 (56)	1.29 (57)
自宅勉強時間	0.41	1.03	0.52
遊 び	屋内	1.47	1.38
	屋外	2.03	1.40
	遠く * 3	2.34	1.38
テレビを見る	2.24	2.31	—

資料：子どもの生活とテレビ、『NHK世論調査資料集 昭和55年版』NHKサービスセンター。

* 1は、「通っている子ども」についての平均。* 2は、* 1をもとに加工した、子ども全体の平均。* 3は、ハイキングや映画などをさす。

注) 調査時期：昭和52年12月上旬。サンプル数415人(男206, 女209)。

と低学年はほぼ等しく(1.2時間：1時間11分)、高学年では東京が33分長い(1.1時間：1時間39分)。この差は、東京の通塾率が全国1位である(同資料から)ことと、高学年ではけいこごとよりも学習塾への通塾者が増えることが反映したものと考えられる。自宅勉強時間は、低学年(1時間：41分)、高学年(1.5時間：1時間3分)ともに南港の方が長い。屋内遊び時間は、低学年(1.8時間：1時間47分)はほぼ等しく、高学年(1.7時間：1時間38分)でもそれほど差はない。屋外遊び時間は、低学年(3.1時間：2時間3分)、高学年(2.2時間：1時間40分)ともに港南がかなり長くなっている。これには、南港は団地内に遊び場が確保されていることと、季節的な影響が考えられる。テレビを見る時間は、低学年(2.3時間：2時間42分)、高学年(2.3時間：2時間31分)ともに東京の方がやや長い。

以上まとめると、東京の小学生と比較して南港小学生は、[学校に行っている時間が長い、学習塾・けいこごとの時間が短い、自宅勉強時間が長い、屋外遊び時間が長い、テレビ視聴時間が若干短い]という特徴がみられた。

2. 子ども部屋

2-1 子ども部屋の保有率

子ども部屋の保有実態を調べるために、「お子さんの睡眠や学習、遊び、その他の活動のための部屋を子ども部屋として確保していますか。」とたずねた。その結果(表8)、2, 3才では約2割、4～6才では約4割が「確保している」と答えている。また小学1年生では、過半数が子ども部屋を確保しており、2年生では8割となる。学年が上がると、保有率が下がる傾向もみられるが、2年生の時点で大多数の子どもに子ども部屋が与えられることがわかる。ただし、ここでいう子ども部屋の「確保」は、母親の主観にもとづくものであり、子ども部屋が必ずしも「個室」を意味するわけではなく、また後述のように家族の就寝室となるケースも含んでいる。

住戸の広さ別に確保率をみたのが、表9である。主寝

表8 母親が「子ども部屋を確保している」と回答した割合

		確保している	確保していない	計
2, 3才		19.8% (22)	80.2% (90)	(112)
4~6才		39.1 (26)	60.9 (41)	(67)
低学年	1年生	57.1 (20)	42.9 (15)	(35)
	2年生	81.0 (17)	19.0 (4)	(21)
	3年生	78.9 (15)	21.1 (4)	(19)
	計	69.3 (52)	30.7 (23)	(75)
高学年	4年生	76.0 (19)	24.0 (6)	(25)
	5年生	64.3 (9)	35.7 (5)	(14)
	6年生	85.7 (12)	14.3 (2)	(14)
計		75.5 (40)	24.5 (13)	(53)

()内は実数

表9 小学生の子ども部屋の確保率
一住戸の部屋数/家族人数別一

家族一人当たりの 部屋数 (比率)	(内訳)	確保 している (%)	確保して いない (%)	該当 サンプル (実数)
1.0	3人・3DK 2人・2DK	92.3	7.7	19
0.75	4人・3DK	87.0	13.0	46
0.7	3人・2DK	50.0	50.0	8
0.6	5人・3DK	95.0	5.0	20
0.5	4人・2DK	39.3	60.7	28
0.4	5人・2DK	33.3	66.7	9

注) 部屋数にDKは含まない。

室以外の余裕室が2室ある3DK住戸では、9割前後の確保率であるのに対して、余裕室1室の2DKの確保率はかなり低い。

近年、子ども室の是非が論議をよび、子ども室の実態についていくつかの調査がなされている(表10)。それらと比較して南港の保有率は低いが、住戸規模を考慮に入れるなら子ども部屋への関心はかなり高いといえるだろう。

2-2 子ども部屋の共用形態

表11は、調査票の住戸プランに記入された家具配置と各室での生活行為から判断される子ども部屋の共用形態を示したものである。小学2年生までは個室の割合は低いが、3年生から徐々に多くなり、6年生では3割の専用化がみられる。それ以上の専用化は住戸規模の制約をうけていると考えられる。先にみたように、子ども部屋の確保は2年生でほぼ一定に達するが、その場合に「個室」としてよりも「共用室」として与えられていることがわかる。

2-3 子ども部屋の決定理由

「子ども部屋を確保している」と回答した母親に、子ども部屋に決定した理由をたずねた(表12)。幼児、小学生

表10 子ども部屋の保有率調査

○国際児童調査(日本青少年研究所)1979年

小3 76%

○児童環境調査(厚生省)1983年(全国約6,000世帯)

①専用 ②共同使用 ①+②

未就学 10.5% 28.6% 39.1%

低学年 25.0 46.3 71.3

高学年 37.9 43.6 81.5

○住まい文化に関する基本調査1983年

(野村総合研究所/住宅産業情報サービス委託)

対象: 東京・大阪・仙台の小学4年生から中学3年生のいる1,565家族)

[全体82.6%]

50㎡未満 56.7%

一戸建 85.3% 50~100㎡ 87.8

中高層 76.9 100㎡以上 92.8

持家 90.8 東京 84.8

借家 58.2 大阪 78.1

資料: 外山純徳・編『現代のエスプリ/子ども部屋』至文堂, 1985

表11 子ども部屋の共用形態(住み方観察による)

	個室	きょうだい共用	両親共用	家族共用	サンプル数
2, 3才	1.9(%)	11.7(%)	25.2(%)	61.2(%)	N=103
4~6才	3.1	20.0	36.9	40.0	N=65
1年生	6.1	39.4	9.1	45.5	N=33
2年生	4.8	66.7	4.8	23.8	N=21
3年生	17.8	58.8	0.0	23.5	N=18
4年生	25.0	45.8	8.3	20.8	N=24
5年生	27.3	45.5	0.0	27.3	N=11
6年生	30.8	46.2	7.7	15.4	N=13

注) 「両親共用」「家族共用」は、子どもが勉強・遊びに使う部屋に子ども以外の家族が就寝する場合である。

表12 子ども部屋の決定理由

	幼児 N=49	小学生 N=89
できるだけ日当たりのよい部屋を与える	46.9%	53.9%
大きさが適当な部屋にする	63.3	57.3
だんらん室からできるだけ遠い静かな部屋を割り当てる	4.1	9.0
できるだけ個室にする	8.2	4.5
台所仕事をしている母親から視線の届きやすい部屋を与える	40.8	29.2
部屋が余ったので子ども部屋にした	6.1	5.6

(複数回答)

ともに最も多かったのは、「大きさが適当な部屋にする」で、ついで「できるだけ日当たりのよい部屋にする」であった。日当たりを重視する回答は、小学生母親に多い。「台所仕事をしている母親から視線の届きやすい部屋を与える」は、小学生3割にたいして、幼児では4割の回答があった。

2-4 子ども部屋についての母親の考え方

これまでに、かなり高い割合で「子ども部屋」を設けている実態が明らかになったが、その母親は子ども部屋についてどのような考えを持っているのだろうか。子ども部屋の「必要性」「占有形態」「(親との)就寝分離時期」についてたずねた結果が表13である。

表13 子ども部屋にたいする母親の意見

	幼 児	小 学 生	
必 要 性	全く必要ない	3.4 %	4.0 %
	子ども用コーナーとして必要	17.5	13.0
	年齢に応じて子ども用コーナー・部屋は必要	71.8	70.4
	子ども部屋を与える必要がある	6.8	11.2
	その他	0.5	0.8
	(N=177)	(N=125)	
占 有 形 態	最初から一人一室	2.3	6.6
	ある年齢に達したら一人一室	34.7	42.1
	ある年齢で異性は分けるべき	32.4	27.3
	同性はずっと共用室	24.3	19.0
	異性でもずっと共用室	5.2	4.1
その他	1.1	0.8	
	(N=173)	(N=121)	
就 寝 分 離 時 期	0~1才	2.4	3.4
	1~3才	10.7	9.2
	3~6才	29.2	30.3
	小学校低学年	36.9	25.2
	小学校高学年	13.1	15.1
中学生	7.7	13.4	
その他	0.0	3.4	
	(N=168)	(N=119)	

子ども部屋の必要性については、幼児母親も小学生母親も最初から「部屋」として与えるのではなく、年齢に応じて「コーナー」または「部屋」が必要と考える者が7割をしめる。「全く必要ない」という意見はひじょうに少ない。

占有形態について、「最初から一人一室」と考えるものはわずかである。最も多い意見は「ある年齢に達したら一人一室」というもので、幼児母親で3分の1、小学生母親で4割の支持がある。それ以外の意見についてみると、「ある年齢で異性は分けるべきだが、同性なら共用室でよい」とする考えを読みとることができる。

「一人一室」と考えている母親に、その理由をたずねた(表14)。幼児では「独立心を養うため」が最も多く、ついで「落ち着いて勉強できるように」が多い。小学生母親では、「勉強」を最も重視している。

就寝分離時期として考えられているのは、幼児母親では「小学校低学年」が最も多いが、小学生母親は「3~6

表14 個室を与える理由

	幼 児 N=64	小学生 N=59
独立心を養うため	46.8(%)	48.3(%)
子どものプライバシーを守るため	29.0	19.0
親のプライバシーを守るため	19.4	20.7
自由にのびのび育てるため	24.2	15.5
落ち着いて勉強できるように	40.3	51.7
入学を契機に心のけじめをつけるため	12.9	20.7

注) 回答者は、個室は必要と考える母親。(複数回答)

才」と早くなっている。これは小学校の入学を機に就寝分離をするというような経験にもとづくのではないかと考えられる。

2-5 小学生が希望する子ども部屋

小学生自身が希望する子ども部屋について、占有形態、部屋でたい行為をたずねた。

「あなたは、どんな子ども部屋がほしいですか」との質問には、どの学年も「一人一室」の答が多い(表15)。1年生の個室要求は半数に満たないが、子ども部屋の保有率が高まる2年生以上では個室要求は強くなり、4・5年生では8割に達する。実際の個室保有率は、先にみたように最高でも3割(6年生)であったが、子ども自身の個室要求と現実のギャップは大きいといえる。

「あなたは何をするために、そのような子ども部屋がほしいですか。」との質問には、「勉強・遊び・寝る」の組み合わせを選択したものが最も多く、ついで「勉強・遊び」である(表16)。また個々の行為別にみると、1位：遊び、2位：勉強、3位：就寝という傾向が強い。

表15 小学生の希望する子ども部屋の占有形態

	一人 一 部 屋	同性なら ば一緒	きょうだい 皆一緒	わからな い	そ の 他	サンプ ル数
1年生	47.1 (%)	11.8 (%)	17.6 (%)	11.8 (%)	11.8 (%)	N=34
2年生	75.0	0.0	15.0	10.0	0.0	N=20
3年生	70.0	10.0	15.0	5.0	0.0	N=20
4年生	82.6	4.3	4.3	4.3	4.3	N=23
5年生	80.0	6.7	6.7	6.7	0.0	N=15
6年生	71.4	14.3	0.0	0.0	14.3	N=14

注) 質問：「あなたは、どんな子ども部屋がほしいですか」

表16 小学生が子ども部屋でたいと思う行為

	勉 強	勉強+ 遊び	勉強+ 寝る	勉強+遊び +寝る	遊 び	遊び+ 寝る	寝 る	その他	サンプ ル数
1年生	6.3	3.1	3.1	65.6	9.4	9.4	3.1	0.0	N=32
2年生	10.0	15.0	0.0	60.0	15.0	0.0	0.0	0.0	N=20
3年生	15.0	25.0	0.0	45.0	5.0	0.0	5.0	5.0	N=20
4年生	4.3	21.7	4.3	47.8	13.0	8.7	0.0	0.0	N=23
5年生	0.0	35.7	0.0	57.1	0.0	7.1	0.0	0.0	N=14
6年生	14.3	0.0	0.0	57.1	7.1	7.1	0.0	14.3	N=14

注) 質問：「あなたは、何をするためにそのような子ども部屋がほしいですか」 単位：%

IV 高層住宅環境が子どもの心身に与える影響について

最近、高層住宅環境が子どもの心身の健康に及ぼす影響については、医師や社会学者の間でも多くの問題が指摘されているが、今回は住環境と子どもの発達の間を把握するための試みとして、子どもの心身の健康を①身体的健康（不定愁訴、発達のおくれ、疾病）②精神的健康（精神状態、性格）とに捉え、前者については不定愁訴を、後者については性格特性をとりあげ分析を行った。なお、子どもの心身の健康は、子どもを中心とするその生活や住環境と最も身近な存在である母親との相互関係によって影響を受けると考えられる。そこで、影響因子として次の因子をとりあげた。

1. 子どもの生活要因……・屋外遊び時間
・屋外遊び比（屋外遊び時間/住戸内滞留時間）
 2. 母親の養育態度要因……・叱責度
 3. 住環境要因……・居住階 ・子ども室保有実態
- 調査は、小学生に対して行ったものである。

1. 不定愁訴と諸要因との関連分析

不定愁訴とは「これといった原因がないのに感じられる体の不調（例えば、疲れ、目の疲れ、肩がこる、腰が痛む、手足がしびれる…など）」であるが、本調査では20項目について（図1参照）、その有無を小学生自身に質問し、「1. 全くない」「2. 時々ある」「3. よくある」の3段階で選択させた。

学年別に比較すると（図略）、子どもでも不定愁訴を訴える割合は高く、特に『疲れ』『腹痛』は「よくある」「時々ある」を累積すると、両学年とも過半数をしめており、続いて『眠い』『乗り物酔い』『寝つきが悪い』……となっている。「よくある」については、ほとんどの項目で学年差は僅少である。しかし、「よくある」と「時々ある」の累積で比較すると、過半数の項目で高学年が低学年より高い割合を示し、不定愁訴を持つ子どもは、高学年の子どもに多いことがわかった。

また性別比較すると（図略）、低学年では、性による差異はほとんど認められないが、高学年の場合、どちらかというと女子のほうが不定愁訴を訴える割合が高い。男子に多い項目としては『便秘』『食欲がない』『イライラ』『眠い』『ぐっすり眠る』で、女子に多い項目としては『疲れ』『吐き気』『腹痛』『目の疲れ』『だるい』『背中や腰が痛い』『めまい』『肩こり』『動悸』である。

1-1 屋外遊び時間との関係

屋外遊び時間を4段階に分類し、それぞれのグループについて不定愁訴得点の平均値プロフィールを示した（図1、2）。低学年では、最も1.0寄りに分布しているのは屋外遊び時間が1～2時間のグループであり、次いで3～4時間である。最も3.0寄りに分布しているのは、4時間以上のグループである。1～2時間のグループはサンプル数が4と少ないために統計的に危険率が高い

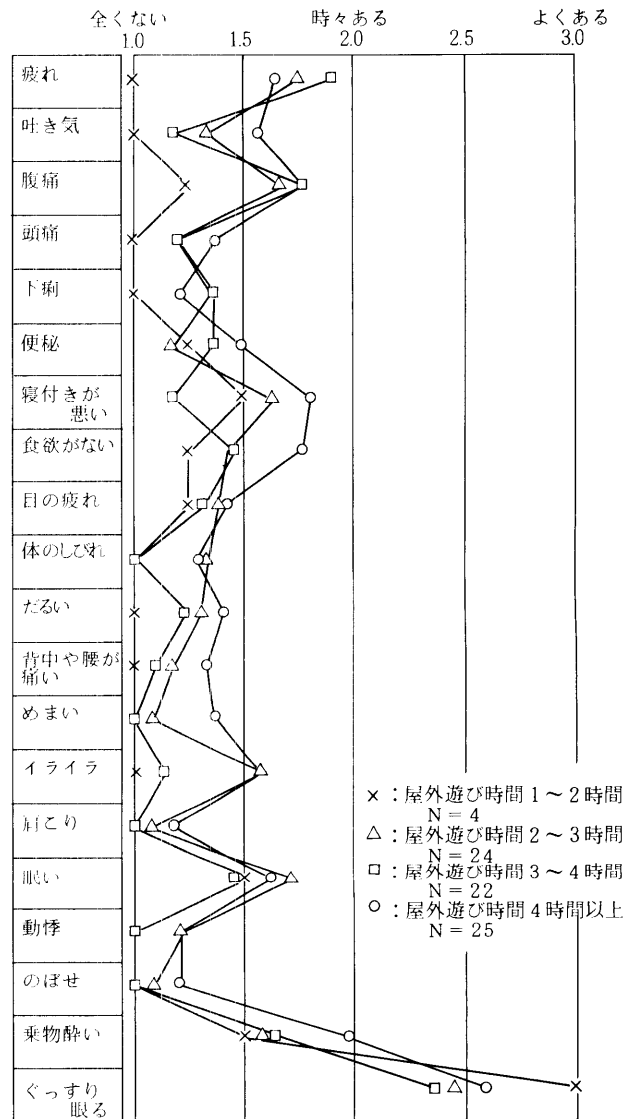


図1 不定愁訴（低学年）
屋外遊び時間別平均値プロフィール

が、1～2時間のグループが最も不定愁訴得点が低く、次いで3～4時間、2～3時間であり、4時間以上の子どもの最も不定愁訴得点が高い。つまり、身体的に不健康であると言える。小学生低学年において屋外遊び時間が4時間以上というのは、放課後のほとんどの時間を屋外遊びによって過ごしていることになり、他の行為との時間配分との関係上、極端に長いといえる時間量であり身体の発達過程において、まだ未熟な年齢であることを考えるならば、屋外遊び時間が4時間以上という長時間の場合かえって疲労感が出るのではないかと。

高学年では、最も不定愁訴得点が低いのは3～4時間のグループで、次いで4時間以上、2～3時間、1～2時間の順になっており、1時間未満の子どもの不定愁訴得点が高い。また、『疲れ』『体のしびれ』『だるい』『背中や腰が痛い』など過半数の項目において、屋外遊び時間が短いほど不定愁訴得点が高い。

表17 屋外遊び時間（居住階比較）

			1時間未満	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上	
低学年	2階	百分比率	0.0	0.0	33.3	50.0	16.7	N= 6
		累積比率	0.0	0.0	33.3	83.3	100.0	
	3～5階	百分比率	0.0	8.3	41.7	25.0	25.0	N=12
		累積比率	0.0	8.3	50.0	75.0	100.0	
高学年	6～9階	百分比率	4.2	0.0	41.7	45.8	8.3	N=24
		累積比率	4.2	4.2	45.9	91.7	100.0	
	10～14階	百分比率	0.0	14.3	42.9	23.8	19.0	N=21
		累積比率	0.0	14.3	57.2	81.0	100.0	
高学年	2階	百分比率	0.0	0.0	66.7	33.3	0.0	N= 3
		累積比率	0.0	0.0	66.7	100.0	100.0	
	3～5階	百分比率	15.4	46.2	30.8	7.7	0.0	N=13
		累積比率	15.4	61.6	92.4	100.0	100.0	
高学年	6～9階	百分比率	15.4	15.4	46.2	15.4	7.7	N=13
		累積比率	15.4	30.8	77.0	92.4	100.0	
	10～14階	百分比率	8.3	16.7	58.3	8.3	8.3	N=12
		累積比率	8.3	25.0	83.3	91.6	100.0	

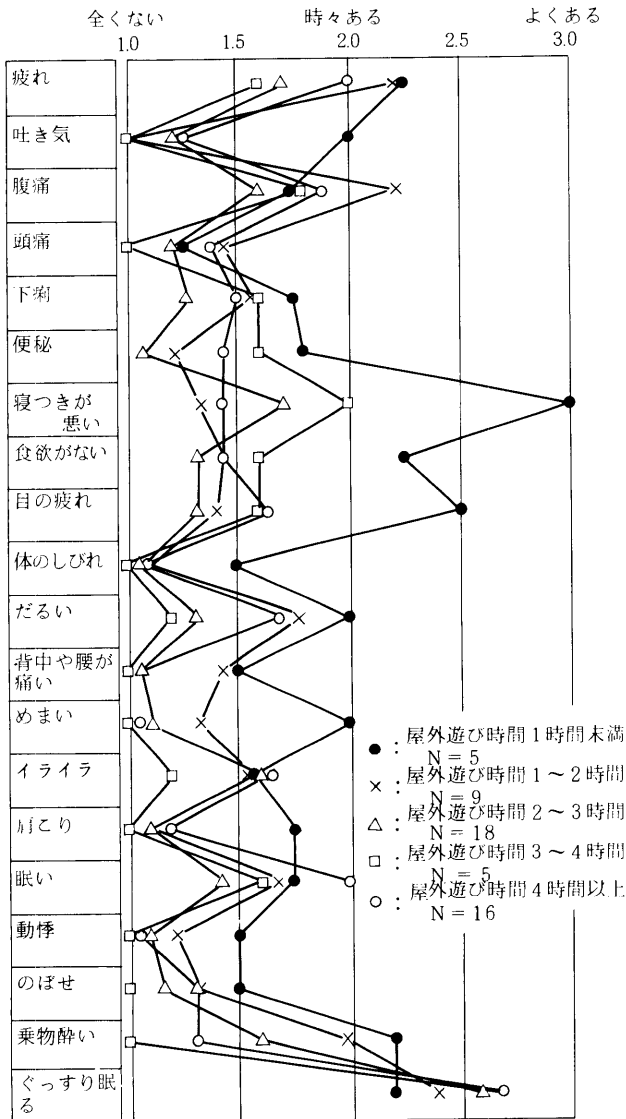


図2 不定愁訴（高学年）
屋外遊び時間別平均値プロフィール

以上のことから、不定愁訴は屋外遊び時間の影響を受けることが明らかであるが、表17に示すように上階は屋外遊び時間が短くなっており、不定愁訴が子どもの生活要因としての屋外遊びからの直接的影響のみならず、住環境の空間条件の間接的な影響を受けていることが認められる。

1-2 屋外遊び比との関係

先の生活時間調査より絶対的生活時間量に加えて、相対的生活志向の傾向を据えるため、平日、晴れの日に住戸内滞留時間（住戸内遊び時間+学習時間+テレビ視聴時間）に対する屋外遊び時間を「屋外遊び比」として算出した。この数値によって屋外志向型と住戸志向型を表すことが可能であると考えられる。

低学年では、その差は明らかではないが（図略）特徴の大きく顕れた高学年では（図3）、屋外遊び比が0.5～1.0の子どもが最も不定愁訴得点1.0寄りに分布し

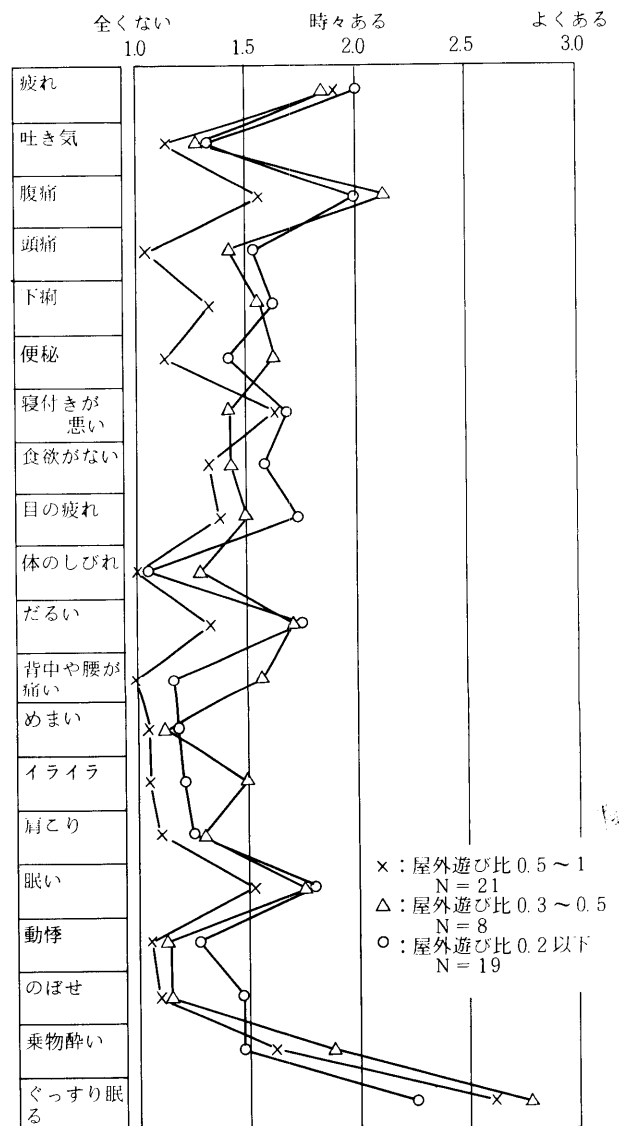


図3 不定愁訴（高学年）
屋外遊び比別平均値プロフィール

ており、屋外志向型の子どもの最も身体的に健康であると言える。また、『吐き気』『頭痛』『食欲がない』『目の疲れ』『だるい』など半数以上の項目で、屋外志向型ほど不定愁訴得点が低い一すなわち健康という傾向が見出せる。

1-3 居住階との関係

不定愁訴のうち『ぐっすり眠る』を除く19項目について、得点の合計を4つに分類し（この得点は高いほど不健康を表す）、居住階別の比較を行った（図4）。その結果、得点の低い子どもの割合は低層階ほど多く、居住階が子どもの身体的健康に影響を与えていることがうかがえる。

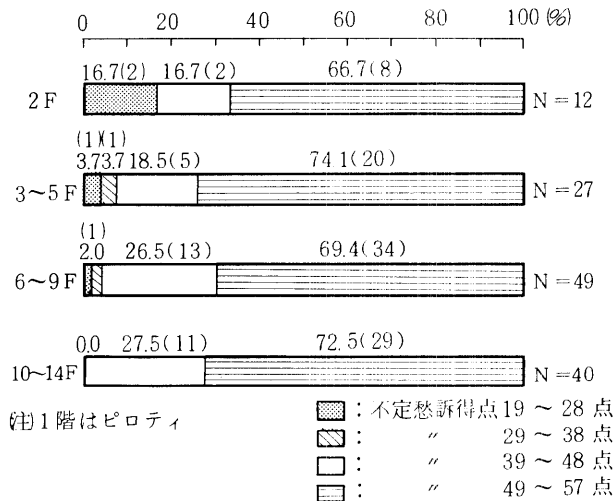


図4 不定愁訴得点（居住階比較）—小学生全体—

1-4 母親の叱責度との関係

母親の養育態度として叱責度を代表させる。「あなたはどのようなことでおうちの人にしかられますか」と質問し、次の9項目——『きょうだいげんか』『勉強』『いたずら』『遊びすぎ』『ぎょうぎが悪い』『整理整頓』『わがままをいう』『無駄使い』『テレビの見過ぎ』から複数選択させ、選択した項目にそれぞれ得点1点を与え、合計したものを「叱責度」とした。その結果（図5）、不定愁訴得点の低い子どもの割合は、母親の叱責度の低いグループに高いことがわかる。

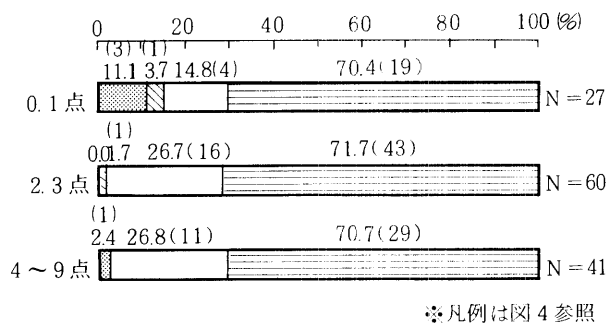


図5 不定愁訴得点（母親叱責度別比較）—小学生全体—

また居住階別に分析すると（図6）、居住階が高いほど母親の叱責度は高く、不定愁訴が母親の叱責度から受ける直接の影響だけでなく、母親を通しての住環境の間接的な影響も受けていることが認められる。

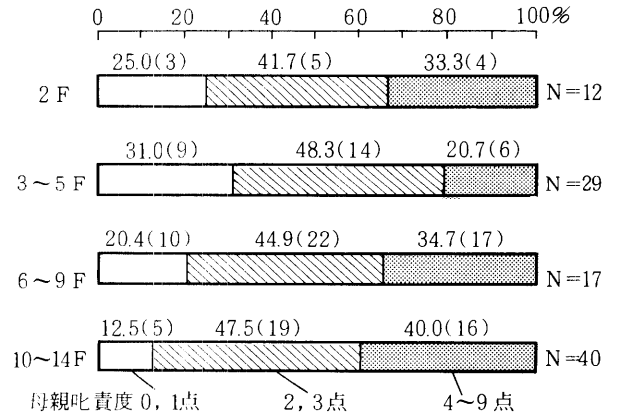


図6 母親叱責度（居住階比較）—小学生全体—

1-5 数量化理論第II類による分析

以上、不定愁訴と諸要因との関係について明らかにしたが、不定愁訴がそれらの要因とどのように関連し、規定されているかを数量化理論第II類を用いて分析した。各アイテムについて、偏相関係数をもとに相関の高い順に、それらのカテゴリー・ウェイトを示したのが表18である。最も偏相関係数の高いのは屋外遊び時間で、次いで母親叱責度、居住階、屋外遊び比の順となっている。レンジで見ると、最も相関の高いのは屋外遊び時間であ

表18 不定愁訴に関する数量化理論第II類による分析（小学生全体）

アイテム	カテゴリー	サンプル数	相関比: 0.644		レンジ	偏相関係数
			低 (-)	高 (+)		
1 屋外遊び時間	1時間未満	4	2.585		2.992	0.497
	1~2時間	8	0.422			
	2~3時間	30	-0.366			
	3~4時間	15	-0.407			
	4時間以上	6	0.562			
2 母親叱責度	0, 1点	9	-1.011		1.310	0.336
	2, 3点	29	-0.299			
	4~9点	25	0.017			
3 居住階	2階	4	-0.344		0.889	0.255
	3~5階	12	-0.548			
	6~9階	23	0.341			
	10~14階	24	0.005			
4 屋外遊び比	1以上	3	-0.798		1.355	0.185
	0.5~1	30	0.028			
	0.2~0.5	25	-0.050			
	0.2未満	5	0.557			
5 子ども室保有実態	個室	17	-0.273		0.374	0.130
	きょうだい共用室	46	0.101			
6 性別	男子	31	-0.146		0.287	0.116
	女子	32	0.141			
7 学年	低学年	37	-0.035		0.085	0.031
	高学年	26	0.050			

※判別成功率 57.0%

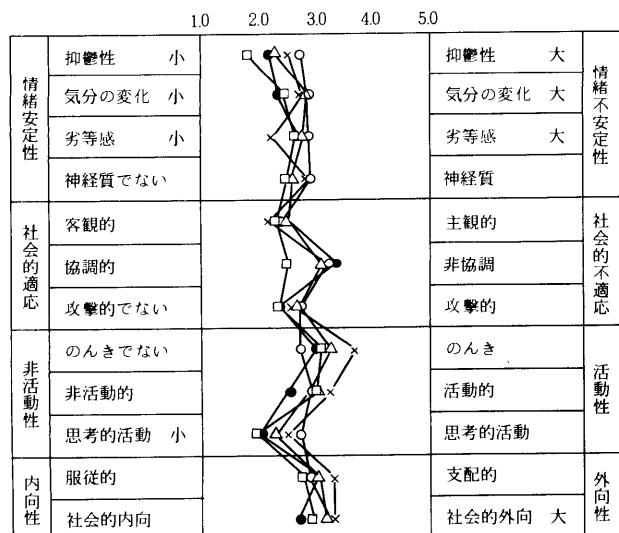
り、相関順位2位以下は屋外遊び比、母親叱責度、居住階となっており、偏相関係数の順位と若干相違はあるが、上位4アイテムの内容は変化していない。つまり、不定愁訴得点を規定する要因として屋外遊び時間が最も大きく、性別や学年などによる影響よりも、母親叱責度や居住階による影響のほうが大きいといえよう。また、カテゴリ・ウェイトを見ると、前述の結果と同様に屋外遊び時間の長いほう、あるいは母親の叱責度の低いほう、居住階の低いほうが不定愁訴得点が低く、身体的健康度は高いと判断できる。

2. 性格特性と諸要因との関係

子どもの精神的健康への影響については、子どものもつ性格特性を検査するという方法を用いた。この性格特性はY・G性格検査(学童用)により測定可能である。Y・G性格検査とは、ギルフォードらによる三種の性格検査を原案として日本で初めて作成された多目的診断の可能な質問紙法形式の性格検査である。この検査では、「抑鬱性」「気分の変化」「劣等感」等の12の性格特性の得点が得られ、また、これらの性格特性は、相互関連の強いものどうしを一群として「情緒不安定性」「社会的不適応」「活動性」「外向性」の4つの因子にまとめることができる。

2-1 屋外遊び時間との関係

「情緒不安定性」因子についてみると(図7)、屋外遊び時間が最も長い4時間以上の子どもが不安定の傾向を示している。逆に、安定性の高いのは、屋外遊び時間3~4時間の子どもである。「社会的適応」因子では、屋外遊び時間3~4時間の子どもが最も『協調的』で、1時間未満が最も『非協調的』となっており、またその差は大きい。『客観的』『攻撃的』の性格特性ではほとんど差は見



● 1時間未満 (N=6) × 1~2時間 (N=13) △ 2~3時間 (N=42) □ 3~4時間 (N=25)
○ 4時間以上 (N=38)

図7 屋外遊び時間別-Y・G性格特性得点・平均値プロフィール

られない。「活動性」因子については、3つの性格特性いずれにおいても1時間未満の子どもが最も低い得点を示しており、非活動的であることがわかる。しかしながら、屋外遊び時間が短くなるほど非活動的という傾向は明らかではない。「内向性」因子に関しては、1時間未満の子どもが強い『社会的内向』を示している。

以上のことより、屋外遊び時間が1時間未満という非常に短い子どもは、社会的不適応性が高く(特に非協調的)、非活動的であり、社会的内向性が強いとの特徴があらわれており、屋外遊びは子どもの社会性の発達に大きな影響を及ぼしているといえる。

表19は、性格特性得点を4因子の平均値で表したもので、以下の分析はこの平均得点にもとづいて行う。

2-2 屋外遊び比との関係(表20)

「情緒不安定性」因子については、屋外遊び比0.2以下の子どもが低い得点を示しており、情緒安定性の高いことがわかる。「社会的不適応」「活動性」「外向性」因子については、いずれの性格特性においても屋外遊び比1以上の子どもが最も得点が低い。しかし、住戸内志向型または屋外志向型の性格特性との関係は明らかではない。

2-3 居住階との関係(表21)

「情緒不安定性」「社会的不適応」は、階が上がるほど得点が高くなっており、10~14階が最も得点が高い。また「活動性」についても同様のことがいえる。すなわち、低層階ほど情緒安定性、社会的適応性は高いが、活動性は低い。

2-4 子ども室保有実態との関係(表22)

個室を保有する子どもの方が、きょうだい共用室の子どもよりも「情緒安定性」は高いといえる。「社会的不適応」「活動性」については顕著な差はみられないが、「外向性」因子では、個室保有の子ども得点が高くなっている。

2-5 不定愁訴との関係(表23)

「情緒不安定性」「社会的不適応」の因子で、不定愁訴を最も多く訴える子ども(「49~57点」)が高い安定性および適応性を示しているが、「19~38点」「39~48点」の差はほとんどない。「活動性」因子では、不定愁訴得点19~38点の子どもの得点が最も低い。「外向性」因子については不定愁訴を多くもつ子どもほど内向性が強く、逆に不定愁訴をもたない子どもほど外向性が強いという傾向が認められる。

2-6 母親叱責度との関係(表24)

「情緒不安定性」因子については、母親叱責度0、1つまり、母親に叱られることの少ない子どもが最も得点が低い—すなわち安定性が高くなっている。「社会的不適応」「活動性」の因子についても同様に母親叱責度0、1の子どもが、その適応性、活動性が高いことを示している。

表19 Y.G 性格特性得点—屋外遊び時間別 (小学生全体)

	1時間未満	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4時間以上
情緒不安定性	9.84	10.39	10.43	9.36	11.21
社会的不適応	8.16	7.92	8.26	7.08	8.24
活動性	7.50	9.46	8.34	8.04	8.30
外向性	5.67	6.62	6.16	5.60	6.05
サンプル数	(6)	(13)	(42)	(25)	(38)

表20 Y.G 性格特性得点—屋外遊び比別 (小学生全体)

	0.2以下	0.2～0.5	0.5～1	1以上
情緒不安定性	9.61	10.48	10.54	9.88
社会的不適応	8.07	7.86	8.06	7.14
活動性	8.26	8.33	8.49	7.13
外向性	5.60	5.93	6.53	5.00
サンプル数	(15)	(54)	(47)	(8)

表21 Y.G 性格特性得点—居住階別 (小学生全体)

	2階	3～5階	6～9階	10～14階
情緒不安定性	8.41	9.90	10.57	11.07
社会的不適応	6.26	7.69	8.23	8.24
活動性	8.17	8.17	8.31	8.49
外向性	5.91	6.27	6.08	5.90
サンプル数	(12)	(29)	(46)	(37)

表22 Y.G 性格特性得点—子ども部屋保有実態別 (小学生全体)

	個室	きょうだい共用	その他
情緒不安定性	9.90	10.66	9.97
社会的不適応	8.22	8.29	7.37
活動性	8.64	8.50	7.84
外向性	6.53	6.14	5.71
サンプル数	(19)	(54)	(38)

表23 Y.G 性格特性得点—不定愁訴得点別 (小学生全体)

	19～38点	39～48点	49～57点
情緒不安定性	11.16	11.87	9.87
社会的不適応	8.67	8.90	7.47
活動性	7.84	8.73	8.56
外向性	6.66	6.44	5.65
サンプル数	(6)	(30)	(85)

表24 Y.G 性格特性得点—母親叱責度別 (小学生全体)

	0, 1	2, 3	4～9
情緒不安定性	9.64	10.50	10.53
社会的不適応	7.56	7.90	8.12
活動性	9.04	7.89	8.17
外向性	6.68	5.73	6.12
サンプル数	(25)	(57)	(41)

2-7 数量化理論第II分類による分析

ここでは、性格因子と前項に挙げた幾つかの影響因子との間にある傾向的関連を数量的に明らかにするために先の12の性格特性を「情緒不安定性」「社会的適応」「活動性」「外向性」の4因子に分け、それぞれの因子について1～5点の標準点を加え、その標準点を外的基準とし、屋外遊び時間、屋外遊び比、子ども室保有実態、居住階、不定愁訴得点、母親叱責度、学年、性別を説明変数として数量化第II類による分析を試みた。

(1) 「情緒不安定性」の影響要因 (表25)

偏相関係数をもとにアイテムの順位をみても「情緒不安定性」因子に最も効いているのは、屋外遊び比であり、次いで屋外遊び時間、性別、母親叱責度、居住階と続きその影響の度合いを理解することができる。また、カテゴリ・ウェイトをみると、屋外遊び比が小さくなるに従いウェイトは負から正に移行しており、屋外志向型の子どものほうがより情緒不安定性の高いことがわかる。一方で、偏相関係数とレンジとの間で若干順位に相違がみられ、特に不定愁訴得点に関してその影響力は強いといえそうである。

表25 情緒不安定性に関する数量化理論第II類による分析 (小学生全体)

	アイテム	カテゴリ	サンプル数	カテゴリ・ウェイト	レンジ	偏相関係数
1	屋外遊び比	1以上 0.5～1 0.2～0.5 0.2以下	2 30 23 5	-3.003 -0.283 0.579 0.236	3.582	0.687
2	屋外遊び時間	1時間未満 1～2時間 2～3時間 3～4時間 4時間以上	4 7 30 14 5	-0.686 0.055 -0.184 -0.182 2.089	2.775	0.684
3	性別	男子 女子	29 31	-0.600 0.561	1.161	0.657
4	母親叱責度	0, 1点 2, 3点 4～9点	8 28 24	0.952 -0.383 0.129	1.335	0.549
5	居住階	2階 3～5階 6～9階 10～14階	4 12 22 22	0.784 -0.360 -0.171 0.225	1.144	0.434
6	個室保有実態	個室 きょうだい共用	17 43	-0.498 0.197	0.695	0.425
7	不定愁訴得点	19～38点 39～48点 49～57点	1 17 42	-1.164 -0.082 0.061	1.225	0.241
8	学年	低学年 高学年	34 26	0.095 -0.124	0.219	0.153

※判別成功率 74.1%

(2) 「社会的適応」の影響要因 (表26)

アイテム順位をみても最も効いているのは、母親叱責度であり、次いで性別、学年、居住階、屋外遊び時間の順位となっている。しかしながら、レンジによる順

表26 社会的適応に関する数量化理論第II類による分析
(小学生全体)

アイテム	カテゴリー	サンプル数	低	高	レンジ	偏相関係数
			(-)	(+)		
相関比: 0.539						
1	母親叱責度 0, 1点 2, 3点 4~9点	8 28 24	0.625 0.333 -0.597		1.222	0.456
2	性別 男子 女子	29 31	-0.372 0.348		0.720	0.352
3	学年 低学年 高学年	34 26	0.344 -0.449		0.793	0.343
4	居住階 2階 3~5階 6~9階 10~14階	4 12 22 22	0.406 0.568 -0.383 -0.000		0.951	0.342
5	屋外遊び時間 1時間未満 1~2時間 2~3時間 3~4時間 4時間以上	4 7 30 14 5	-0.539 -0.596 0.076 0.118 0.480		1.076	0.234
6	屋外遊び比 1以上 0.5~1 0.2~0.5 0.2以下	2 30 23 5	0.339 0.203 -0.221 -0.336		0.675	0.204
7	不定愁訴得点 19~38点 39~48点 49~57点	1 17 42	-1.192 -0.159 0.093		1.285	0.186
8	個室保有実態 個室 きょうだい共用	17 43	-0.207 0.082		0.289	0.127

※判別成功率 72.2%

表27 活動性に関する数量化理論第II類による分析
(小学生全体)

アイテム	カテゴリー	サンプル数	高	低	レンジ	偏相関係数
			(-)	(+)		
相関比: 0.430						
1	居住階 2階 3~5階 6~9階 10~14階	4 12 22 22	-0.170 1.348 -0.359 -0.345		1.707	0.482
2	屋外遊び時間 1時間未満 1~2時間 2~3時間 3~4時間 4時間以上	4 7 30 14 5	1.963 -0.868 -0.152 0.277 -0.217		2.831	0.429
3	屋外遊び比 1以上 0.5~1 0.2~0.5 0.2以下	2 30 23 5	-0.227 0.264 -0.465 0.643		1.108	0.288
4	母親叱責度 0, 1点 2, 3点 4~9点	8 28 24	-0.724 -0.087 0.343		1.067	0.264
5	不定愁訴得点 19~38点 39~48点 49~57点	1 17 42	-1.835 -0.277 0.156		1.991	0.234
6	性別 男子 女子	29 31	-0.159 0.149		0.308	0.130
7	個室保有実態 個室 きょうだい共用	17 43	0.152 -0.060		0.212	0.077
8	学年 低学年 高学年	34 26	-0.023 0.029		0.052	0.020

※判別成功率 67.7%

位は、不定愁訴、母親叱責度、屋外遊び時間、居住階となっており、子どもの生活要因および住環境要因が子ども自身のもつ属性と相互に関連しあって「社会的適応」因子に影響を及ぼしていると言えよう。また、カテゴリー・ウェイトをみると、居住階が6階以上、屋外遊び時間が2時間未満、屋外遊び比が0.5未満(住戸内志向型の子どもを意味する)でウェイトは負の値が大きくなっており、これらの要因が「社会的不適応」因子に効いていることがわかる。

(3) 「活動性」の影響要因 (表27)

偏相関係数より、その順位は居住階、屋外遊び時間、屋外遊び比、母親叱責度となっており、居住階という住環境が「活動性」因子に大きな影響を及ぼしていることが明らかである。また、カテゴリー・ウェイトをみると居住階が3~5階、屋外遊び時間が1時間未満、屋外遊び比が0.2以下という要因が特に「非活動性」因子に効いている。

(4) 「外向性」の影響要因 (表28)

偏相関係数より、その順位は屋外遊び時間、居住階、不定愁訴得点、屋外遊び比と続いており、ここでも居住階の影響の大きいことがうかがえる。カテゴリー・ウェイトをみると、屋外遊び時間が4時間以上、居住階が3~5階、不定愁訴得点が19~38点で負の値が大きくなっており、これらの要因が「外向性」に効いていることがわかる。

表28 外向性に関する数量化理論第II類による分析
(小学生全体)

アイテム	カテゴリー	サンプル数	高	低	レンジ	偏相関係数
			(-)	(+)		
相関比: 0.416						
1	屋外遊び時間 1時間未満 1~2時間 2~3時間 3~4時間 4時間以上	4 7 30 14 5	0.880 -0.448 0.306 0.009 -1.941		2.821	0.459
2	居住階 2階 3~5階 6~9階 10~14階	4 12 22 22	-0.324 -0.542 0.575 -0.220		1.117	0.325
3	不定愁訴得点 19~38点 39~48点 49~57点	1 17 42	-2.417 -0.378 0.211		2.628	0.296
4	屋外遊び比 1以上 0.5~1 0.2~0.5 0.2以下	2 30 23 5	0.569 -0.083 0.247 -0.865		1.434	0.234
5	母親叱責度 0, 1点 2, 3点 4~9点	8 28 24	-0.721 0.111 0.111		0.832	0.219
6	個室保有実態 個室 きょうだい共用	17 43	0.137 -0.054		0.191	0.068
7	学年 低学年 高学年	34 26	0.071 -0.093		0.164	0.063
8	性別 男子 女子	29 31	0.023 -0.022		0.045	0.018

※判別成功率: 70.1%

要約

1. 高層住宅の子どもの生活時間と子ども部屋に関する分析では、以下の特徴がみられた。

(1)テレビの平均視聴時間は2時間余で、この傾向は2～3才から小学校高学年まで同じであった。また4時間以上テレビを見る子どもが2割も存在した。

(2)生活時間の居住階別分析の結果、より住環境の影響を受けやすいと思われる幼児で、上層階の方が屋内遊び（住戸内遊び、住棟内遊び、テレビ視聴）時間が長く、屋外遊び時間が短いという結果を得たが、小学生について同じ傾向は見出せなかった。

(3)生活時間について、NHK調査(昭52、東京)との比較を試みたが、高層住宅環境のために子どもの生活が阻害されていると考えられる傾向は見出せなかった。この比較では調査時期が異なるという問題があったので、今後は独自の調査で住宅形態比較を行う必要がある。

(4)子ども部屋の保有率は高く、2年生で8割であった。住戸規模の制約のために、きょうだい共用が多いが、それでも6年生では全体の3割が個室であった。

(5)子ども自身の個室要求は強く、高学年では8割に達する。子ども部屋でしたいと希望する行為は、「勉強・遊び・就寝」の組み合わせが最も多く、自立志向が強うかがえるものであった。

(6)子ども部屋にたいする母親の意識をみると、現在の住み方を反映していると思われるが、子ども部屋は年齢に応じた与え方が望ましいと考え、結果的には個室支持が多くみられた。

2. 高層住宅環境が子どもの心身に与える影響については、不定愁訴と性格特性への影響を分析する方法とった。従来、高層住宅の上層階ほど屋外遊び頻度が少ないことは多く報告されてきたが、今回、そのことが心身に及ぼす影響について明らかにしえたことは意義があると思われる。また、住環境が直接子どもに及ぼす影響のみならず、住環境の媒介因子であると同時に独立の因子となる母親叱責度との関連についても分析を行うことができた。

(1)小学生でも不定愁訴を訴える場合は高かった。不定愁訴に最も寄与しているのは、屋外遊び時間であった。ついで母親叱責度、居住階である。すなわち、屋外遊びが少なく、母親によく叱られる子どもは身体的に不健康であるといえる。これらの因子は居住階との相関関係がみられ、上層階ほど屋外遊びが少なく、母親叱責度が高かった。

(2)性格特性の分析でも、情緒安定性、社会的適応性、活動性、外向性の4因子について、住環境の直接的、間接的影響が明らかにされた。しかし、一部には説明不能な傾向も見出されている。今回はひとつの試みで、サンプル数や因子抽出の問題が残されており、今後の課題で

ある。

〈研究組織〉

湯川利和	奈良女子大学家政学部住居学科・教授
瀬渡章子	同 大学院人間文化研究科・助手
塘なお美	同 家政学部住居学科・教務補佐
糸賀万記	同 大学院家政学研究科修士課程 (現在、地域設計研究所(働勤務))